

No.8 長澤 伸穂 「トンボヒコーキのメッセージ」

Nobuho Nagasawa

北川フラムさんのコラム / 1995 (平成7) 年 6月1日付 立川市市報記事より

長澤伸穂の「トンボヒコーキ」という名のツリーサークルは、太古の時代から生存し、なおかつ作家の幼いころの武蔵野に多くいたトンボのイメージと、大正時代は陸軍飛行場で、戦後は米空軍の基地の街になった立川の飛行機との2つのイメージを、その類似した姿にヒントを得て12個のトンボヒコーキとして少しずつ変化させたものである。

彼女にとって再開発の理想は、都市空間の中に木を根付かせることだった。その意味では木の成長を守るツリーサークルを作るとは、意味深いものだった。これはまさにファンクション（機能）を、フィクション（物語）にするという、「ファーレ立川アート計画」そのものの精神だった。

作家のメッセージ / 日本住宅公団（現：UR都市機構）「ミニ通信」より

トンボは、太古の時代から生存した、最もプリミティブな原形を今に残すという。

縄文時代 から大規模な集落があったという立川一帯は、日本がアキツ(トンボ)の国と言われた頃から、トンボの群生が見られたに違いない。幼ない頃私が育った多摩地区は、ススキの林の中にも、多摩川の川辺りにも、トンボの姿が見かけられた。

大正時代には陸軍の飛行場が完成し、戦後は米国の進駐により基地の街となった立川—産業の発展にともない、豊かな自然がしだいに移り変わり、トンボの羽に変わって飛行機の翼が立川の自然の中に影を映すようになった街は、時の流れを経て、今また生まれ変わりつつある。

立川基地跡の再開発事業にあたり、都市空間の中に木を根付かせることを、提案したい。

ART 以前にまず木を植えることは、今に始まったアクションではない。

そして、木の成長を守るオブジェのツリーサークルが、ファンクション(機能)をフィクション(物語)に、という開発計画のコンセプトに展開することを期待しながら、トンボヒコーキを木の根元に、そっと設置したい。